

藩祖毛利高政公 (二)

會員 御手洗 一而
(東京新報社)

(疎前)

「猿といつても、犬や猫の動物とは違ふんじや。旦那、勘八郎の友達に與太郎といふのがいるじやろ。其太郎のことといつても皆で何と呼んでゐる？」

「かゝることか」

「そうじや。あだ名といつてな。皆がつける名前じや」

「そうか。その人、猿に似てるんじやのう」

勘八郎は納得したが、両親は吹き出してしまった。

勘八郎は、このかゝるや子供仲間とよく荒子落ちの川に魚とりに行つて遊んだ。名古屋湾に注ぐこの掘割のような小川は、よく葦がしげり、田んぼから沼につづく河川敷が広く、子供たちの遊び場には格好の場所であつた。子供たちは、膝まで水につかつて小魚を、葦で編んだ簀すで追いあげて楽しんで、勘八郎は其三郎に作つてもらった、小さな銚ちやうで魚を突くのが得意であつた。

そして、ねばり強いのも特徴であつた。

一匹もとれない日など、友だちの催促などには耳も借さず、目が出る頃になつても帰らうとせず、逆えにこられるのは度々であつた。こんな時は、かゝる仲間も帰るには帰れず、よその親たちに苦情をもらつたのも度々なつてゐた。

(四)

高次や於鶴にとつて、勘八郎の成長は何より楽しんであつた。しかし、やんちゃな勘八郎をこつびどく叱つたことがある。

八歳の夏のことである。今日も朝から水遣ひに興じていたかゝるが、びっこを引きながら足を血に染め、大声で泣きながら帰ってきた。於鶴は眼ざとくかゝる血を止め、たが、まぎれもない銚ちやうの突き跡であつた。

この話を聞いた高次は、それでも帰つて来なかつた勘八郎を連れもどし、藪山の松の大木にしがりつけた。この日は運悪く一匹もとれなかつたのである。

「たわけが」

高次の怒鳴る声に、勘八郎は今にも泣き出しそうな顔をしてゐる。

「魚と、かゝる足の見分けがつかぬのか。その上大事な友だちを助けんとはどつていふことじや」

勘八郎は唇をかみしめながら、遂に泣き出してしまつた。

「あやまちも誰にもある。が、そんなことじやお前をんか誰か助けてやるもんか」

高次は、そのまゝ裏山を下りた。日が落ちて、あたりが暗くなつても人の気配はなかつた。時折、鳥の羽成た音が無気味に恐怖をかきたてる。

勘八郎は心細くなつて、声も出なくなつた。於鶴が助け舟を出した時は、あたりが真暗になつてゐた。

「勘八郎、父の言うことが判つたか。判つたら、一人で其太郎にあやまつて来い。それが出来るなら父に許しをこつてやろ」

勘八郎は蒸直に大ききうなずいた。そして鏡の解けた勘八郎は、小走りに駆け出して行った。

こんなことがあつてから、勘八郎はよく年下の子供たちを面倒をみ、典三郎に生まれた仔犬を典九郎と、一番可愛がるようになった。

そんなある日、晩秋のそよ風が稲の穂を包む頃、昼下りに一騎の早馬が屋敷の前でピタリと止つた。居合せた典三郎は、また合戦かとい瞬きくりとした。

小者は、秀吉の使い番であつた。

「森殿、秀吉殿がご援助願ひたいとのことでございます。製方様にも重々お頼み申せとの使いでござる。」

「援助とは何のことござるうか。」

「実は、此度秀吉殿が墨股の築城を仰せつかつた。御承知の通り、墨股の築城は、佐久間信盛殿や柴田勝家殿が手をとめながら、一向にらちもあかず、秀吉様は強引にその役目を申し出なされ、是非とも信長公のご期待にそいたいとのことござる。ついては、森殿には、一方の組頭として、旗上げ願ひたいとのことござる。すでに秀吉様知己の諸家には早馬が出されておられ、一刻も早くご出馬願ひたいとのことござる。小者は、かいつまんで用件を話した。高次は敵組みをしなから、じつと考へこんだ。

「信長公が承知とあらば是非もあるまい。」

その言葉の終らないうちに、

「それはかまじけなない。」

小者は北伏すように両手を伏した。茶鶴は、高次の出馬承諾を聞いて、ふと藤吉郎を思い出してた。

「大へんな仕事だ。あの城攻めの猿の話もまんざらう

そではなかつたのであらう。」

高次は、墨股で初めて秀吉に会つた。

秀吉は、何年未の知己のように敬待してくれた。

「森殿、助かるまい。かまじけなない。おつるや勘八郎は元氣かな。」

高次は、勘八郎の消息まで聞かれて、意外に思いながら悪い気はしなかつた。

そして、稲田・青田・蜂須賀ら各組頭に紹介された。そこには、続々と近郷の上豪が集まつていた。

高次は、一方の組頭として一族を率い、櫓や塀などの用材を組んで葺す作業を分担した。秀吉は、齊藤方の攻撃に備えて、防禦隊員と築城隊の二手に分け、それぞれ地域を分担して、流れ作業の方式をとつた。

墨股は、長良川の西岸に位置していたが、木曾川・長良川・揖斐川の合流地点が近く、土壌が低いため、その築城は困難を極めた。

しかし、秀吉が分担流れ作業は見事に功を奏し、数日にして墨股築城を完成させた。

これが世にいう墨股の一夜城である。

信長の喜びようも想像出来るが、秀吉はこの橋頭堡の完成で林を上げ、やがて墨股城を預かるまでに出せした。これ以来、高次は秀吉に属するようになった。

(五)

秀吉が曲がりなりにも一城を預けられるようになる。築城に参加した各土豪も、それなりに一部將としての地位を保つようになった。

高次と秀吉の関係も、これを境に切つても切れな

で結ばれることになる。

北に西に、美濃口を脱みながら橋頭堡を築く間、信長の懐柔作戦は遠くに及んでいる。近江の成井長政と妹の市市との婚姻から、同盟を結ぶのもこの頃のことである。永祿十年入春になると、信長の眼目伊勢にも及び、徐々に天下へと向けられつつあった。

秀吉は、約三千の兵とともに墨股城を守り、築城を機に新しい家臣団が生まれつつあった。高次もその一翼をにない、城詰めの日々が続くようになると、森家もひっそりとして主人のいない留守はやはり淋しかった。この頃から勘八郎の態度も少しづつ変わりつつあった。

九蔵はなつた勘八郎にも、子供心に父のいない意味が理解されるようになっていた。それでも時々於鶴と雨らせることがある。

「母君、父上のいない時は、敵が攻めてきたらどうするんじや」

村の働き手がほとんど高次に従って外に出ると、都落という都落はどこもひっそりとして、勘八郎の眼にも不安に映ったのがむしろない。

「勘八郎も男であるう。父の代りに槍を持って戦うんじや。そうして城の大將になりやたいし左もんぞ」

「城の大將か」

「そうじや。勘八郎は興三郎に連れられて、名古屋の城を見たであらう。あのような城の大將になるんじや」

勘八郎は眼まがやかして大きく頷いた。勘八郎は高次の用事で興三郎が名古屋の町へ出る時、初めて城を見てその大きさに驚いた。そして墨股城の築城の話と聞くとき、おんなな大きな城を造るのであらうと想像した。

勘八郎は、あまり口数の多い子供ではなかったが、理解の出来ないことは判るまでうるさいほど質問した。それからこそ、子供にしてはそれのない動作や振舞いが、親の眼にも頼もしく感じられ、一日一日の成長が楽しんでいた。

織田方の美濃懐柔作戦は、その間能元間なく続けられ、稲葉山城の内ふとこまでくはいこんでいた。その結果、翌年の夏になると、かつて奇謀奇策の重臣であった稲葉・氏家・安藤の連合軍が突如として竜興を攻め、竜興は伊勢長島に落ち延び、信長は待望の美濃を平定することが出来た。

信長は、竜興を稲葉城から追い出すと、岐阜城と改名して、ここを根拠地として居城することにした。

美濃の平定が終ると、墨股城によつた土家左も、交替で帰郷を許された。高次もすぐ帰りたかつたが、岐阜城から帰城する秀吉を待って一心の挨拶をすることにした。

秀吉は二日ほどして帰城した。信長公から再度難問を仰せつかったためであらうか。うかぬ顔をしてはいたが、高次が挨拶に出ると、後橋のある顔をしやくしやにして喜んでくれた。

「そうか。今のうちには帰って来るか。於鶴が喜ぶであらう。一度中つくり於鶴にも会いたいが、今のうち後会もあるう。勘八郎は幾つになるかのう」

秀吉はじつと考えこんでいた。

「九蔵はなりました」

「もう七、八年も経つのか。そうそう、おれは橋頭堡の合戦の時であった。早いもんじやのう。あつた勘八郎、もう少しで馬で馳とばすところであった、妙なと

こゝで於鶴に会えたが、おの子が於鶴の子であると知つた時は、合戦よりもぞつとしたわい。今思い出して、も寒気がする。」

秀吉はこう言つて首をすくめた。それから秀吉は、小者で言つて馬の玩具を持ってこさせた。

「高次殿。これはあの時の詫びじや。勘八郎への土産にしてくれ。」

差し出した玩具は、木彫りの巧妙な馬だ駒であつた。

「勘八郎め、果報者でございます。」

高次は有難く頂戴した。

「高次殿。一度死んだ人間じや。勘八郎、大物になるぞ。」

「それであればよろしゆうございますか……」

高次は嬉しそうにその場を立ち去つたが、すぐに於鶴や勘八郎に会いたかつた。

報告記

中国訪問記 (第三回)

—主として歴史的分野について—

会員 古藤 田 太

(外生所大宮江良)

(五) 大運河

私達は、いよいよ蘇州を訪ねる日が来た。宿舎は、南京ホテルであつた。

朝早く散策してみると、深い霧の中に、サンゴジユヘ

拜期(と)タイサンボク(へ)泰山(山)が多い。

古くから日本人に親しまれた蘇州は、水の都と聞いていたが、水が濁っているので、水の都と云うのは、イメージが違ふようである。それで、水路が発達して、小舟が家々の裏脊戸まで入つて行く所が多い。

ここ蘇州には、七世紀の初め(紀元六〇一年)から、大運河が通っている。所によつて運河の名称は七がうが、杭州を穿した運河は、太湖のほとり蘇州を経て、揚州や幾つかの湖を抜けて北京に達する。延々千七百九十四キロ及び、万里の長城と並ぶ世界の土木工事であつた。

一九五八年(日本昭和三十三年)、人民公社の設立促進が党中央で決定されて、中国の大躍進が始まると、それに応えて、大運河の本格的な改修工事が始まられた。農業の振興その他、華北地帯に水を送る、いわゆる南水北流または南の食糧を北に調達する、南糧北調といわれる計画に副うものである。

現在の江北大運河は、幅最小二百メートル、最大五百メートル、水深七メートル、優に千トまでの船が航行できるものと成り、

古代以来の面目を一新したものであるが、蘇州の付近は、このように大きなものではない。

この大運河は、隋の煬帝の時に開闢されたもので、隋は、僅かに四

〇年の短命王朝で

